【実践報告】

学部を超えて集い，議論する高年次教養セミナー

2021 年度を振り返る

清島 絵利子
岐阜大学教育推進・学生支援機構

要旨

本報告は，学部の 3～4 年生を対象とした全学共通教育の複合領域科目「高年次教養セミナー」の 2021 年度の開講状況を振り返ったものである。このセミナーは，毎回，様々なテーマのもと，学部を超えた学生が各自の専門的見地により議論を重ね，教養を深めていくことを目的として開講し，4 年目を迎えた。2021 年度は，例年以上に，高年次教養教育に興味関心がある意欲的な学生の受講があった。従来と同様，学生と教職員が垣根を超えて自由な雰囲気で様々なテーマについて議論できたため，受講生や教職員からは好評を得た。次年度からは岐阜学科目として開講する。引き続き，高年次の学生が社会に出る前に教養を深められる機会を提供していきたい。

キーワード：高年次，教養教育，学部混成型セミナー，異分野からの学び，学生と教職員の交流

１．はじめに

高年次教養セミナー（以後，本セミナー）は，2016 年 10 月にはじまった学部混成型セミナーの「Party ゼミ」が前身である。eplus（education planning university student team：岐阜大学教育企画立案学生チーム）という教養教育の改善を目的に活動する学生組織と教養教育推進部門（当時）が，毎月 1 回金曜日の 17 時から 19 時に，学部の枠や学生と教職員という立場を超えて互いに様々なテーマについて議論する機会を設けたことによる。2018 年 4 月からは，全学共通教育の複合領域科目で選択 1 単位の正式な授業として新規開講し，2021 年には 4 年目を迎えた。新規開講に至った経緯の詳細は，清島（2022a）を参照してほしい。

Party ゼミや本セミナーでの講義や意見交換は，2019 年度までサテライトキャンパスでおこなわれていた。学生も教職員も，時間と交通費をかけてキャンパスの移動が必要だが，立場や学部，各自の専門という枠を超え，自由な雰囲気で議論し，セミナー後には任意参加

の食事会を通して 21 時頃までテーマについて語り合い，親交を深めることができていた。専門以外の知識や教養を身に付けることで視野を広げたい学生と異文化からの学びを学生に伝えたい教員の相乗効果で，時間を忘れて議論に花が咲く時が多かった。2019 年後学期に受講したある受講生は，「教員は遠い存在だと思っていたが，講義のあとに親しく話を交わすことで，身近な存在になった」と話していたことがある。しかし，筆者が，2019 年 11 月 25 日に参加したシンポジウム「高年次教養教育の試みとその成果」（主催：早稲田大学大学総合研究センター）では，他大学で展開されている高年次教養教育（または高度教養教育）は，本学のような実施形態ではなく，学生と教員の距離を感じるものであった。本セミナーは，教養教育を通して学生と教職員が交流し，距離を縮めることができる，他大学には類をみない貴重なものであると自信をもっている。

２．2020 年度コロナ禍での開講

2020 年 1 月から，日本においても，新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染拡大がはじまった。そのため，本学でも，一部休業や遠隔授業を余儀なくされた時期があった。対面授業は同年 6 月 4 日（木）から再開したが，本セミナーも，前学期全 5 回のうち 3 回は，Web 会議システム（Zoom や Teams）を通じて実施せざるを得なかった。ある受講生から「バスに乗って移動するのが怖い」という申し出があったことと，学生と教職員間での感染や濃厚接触を避けるためである。そこで，対面授業の場所も，公共交通機関等での移動というリスクを減らし，サテライトキャンパスから柳戸キャンパスに変更した。そのため，セミナー後に自由な雰囲気のなかで学生と教職員が交流を図りながらテーマについて語り合う機会も失うことになった。受講生は，少数ではあるものの意欲的かつ熱心で，講義を通じてのコミュニケーションは密度の濃いものになった。しかし，2019 年度までのように，学生と教員の距離を縮めることは若干困難になった感がある。

３．2021 年度の概要

2021 年度も，新型コロナウイルス感染症収束の気配が見られず，キャンパス間の移動による感染リスクを避けるため，引き続き柳戸キャンパスでの実施となった。授業後の交流の機会も 2 年連続で失われたが，文系理系問わず個性豊かな先生方に非常に興味深く魅力的な講義を開講していただけることとなった。2021 年度も，表 1 のように，様々な専門分野における 10 名の先生方が快く講義を引き受けてくださったおかげで，無事，開講に至ることができた。表 1 では，担当していただいた講師の敬称は省略する。

表１　2021 年度 講師氏名・所属部局・テーマ一覧表

開催回	講義年月日	講師氏名	所属部局	テーマ
第1回	2021.04.16	山田　敏弘	教育学部 国語教育講座	暮らしの中のロマンス語
第2回	2021.05.14	野村　幸弘	教育学部 美術教育講座	絵から何が読み取れるか？
第3回	2021.06.04	八代田　真人	応用生物科学部 生産環境科学課程 応用動物科学コース	肉を食べることは問題か？
第4回	2021.07.09	吉野　純	工学部 附属応用気象研究センター	天気予報とビジネス
第5回	2021.07.30	塚本　明日香	地域協学センター	五行思想への反発 ―『魏書』から読む魏収の思想
第1回	2021.10.15	田中　嘉津夫	岐阜大学	常陸国うつろ舟奇談－SFと民俗伝承の狭間
第2回	2021.11.05	光永　徹	応用生物科学部 応用生命科学課程 分子生命科学コース	天然物化学への招待　～薬と毒は紙一重～
第3回	2021.12.17	大平　幸子	医学部 看護学科 地域健康援助学講座	社会問題から心の健康を考える
第4回	2022.01.21	髙木　朗義	社会システム経営学環	協働と共創のまちづくり
第5回	2022.02.04	内海　志典	教育学部 理科教育（化学）	答えが１つでない問題にどのように答えをだすのか。

2021 年度からは前学期と後学期に図１のポスターを作成し，全学共通教育棟玄関前や廊下に掲示をした。また，教育推進・学生支援機構の Facebook で宣伝をおこなうなど，学生への周知を図った。

図１　2021 年度高年次教養セミナーⅠ・Ⅱのポスター

３．１　2021 年度前学期を振り返る

2021 年前学期は，受講登録者数が 10 名（内訳：工学部 3 年生 10 名）であった。開講 4 年目にして，受講生 10 名を迎え，講師を囲んでゼミ形式で講義ができるようになった。開催回によっては，大学院生や社会人聴講生などが数名聴講することもあった。今回，例年にない受講者数となったため，学生にどのように情報を得て受講に至ったのかを尋ねた

ところ，2021 年度のシラバスを見て興味を持ったと話していた。しかし，集中講義のページを開かなければ，本セミナーがあることに気づかないとの意見があった。今後，シラバスへの掲載方法も考慮する必要があることが分かった。次に，清島（2021）を一部引用・改変し，2021 年度前学期第 1 回～5 回の授業を振り返る。ここでは，担当していただいた講師の所属は省略する。

①第 1 回（2021.04.16）山田敏弘先生「暮らしの中のロマンス語」

私たちの暮らしの中にはロマンス語があふれており，英単語の多くはロマンス語系であるというお話があった。その一例として，本セミナーのために作成してくださったオリジナルの元素記号の一覧表をもとに，語源の解説をしていただいた。

図 2　第 1 回　山田先生の講義風景

②第 2 回（2021.05.14）野村幸弘先生「絵から何が読み取れるか？」

フェルメールなどの数枚の絵画を見て，アメリカの教育現場で実践されている美術鑑賞法の 1 つ「ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ」を全員で体験した。歴史的背景や作者の経歴をもとに絵を鑑賞し，それぞれの解釈を語り合い，絵画の理解を深める方法を学んだ。

図 3　第 2 回　野村先生の講義風景

③第 3 回（2021. 06.04）八代田真人先生「肉を食べることは問題か？」

肉（牛肉）の消費拡大に伴う家畜生産は，地球温暖化の主要な要因の１つであるとされている。近年は代替肉，培養肉が徐々に活用されており，その現状と是非について全員で議論した。講義後には，「代替肉を食べて，感想を提出する」という宿題が課された。

図４　第３回　八代田先生の講義風景

④第４回（2021.07.09）吉野純先生「天気予報とビジネス」

気象予報士の資格をお持ちで，毎日，岐阜県や愛知県の天気予報を HP で発表されている。大企業ほど，気象情報による意思決定をおこなっており，さらなる活用が企業に利益をもたらすというお話であった。

図５　第４回　吉野先生の講義風景

⑤第５回（2021.07.31）塚本明日香先生「五行思想への反発 ―『魏書』から読む魏収の思想」

魏収（506-572 年：北斉の文人，『魏書』の選者）は，次々に王朝が変わる時代において，世の中の万物を五要素（木，火，土，金，水）で解釈する五行思想に代わる新しい思想を求めた歴史的背景などを詳しく解説をしていただいた。

図 6　第 5 回　塚本先生の講義風景

３．２　2021 年度後学期を振り返る

2021 年後学期は，受講登録者数が 12 名（内訳：工学部 4 年生 3 名，3 年生 9 名）であった。前学期から引き続き年間を通じて受講した学生は，6 名であった。2021 年度も含め，本セミナーを前学期に受講した学生は，ほぼ高い確率で後学期も受講する傾向がある。学生数名にその理由を尋ねたところ，「はじめはどのような講義なのか不安だったが，先生方の講義が楽しくて自分のためになることが分かったので，後学期も受講しようと思った」と話してくれた。1 回出席すると，どの学生も本セミナーの良さや専門以外の教養を身に付けることの楽しさを実感しているようである。次に，清島（2022b）を一部引用・改変し，2021 年度後学期第 1 回～5 回の授業を振り返る。ここでは，担当していただいた講師の所属は省略する。

①第 1 回（2021.10.15）田中嘉津夫先生「常陸国うつろ舟奇談－SF と民俗伝承の狭間」

ご専門は電磁気学だが，オカルトを信じてのめりこむ学生を救いたい思いがきっかけで、長年「うつろ舟」の研究をなさっている。UFO に似ている乗り物が描かれている曲亭馬琴『兎園小説』，長橋亦次郎『梅の塵』など多くの古文書を読み解き，文献に記されている土地に足を運ぶなど，緻密な調査研究から得られた多くの知見をお話しいただいた。

図 7　第 1 回　田中先生の講義風景

②第２回（2021.11.05）光永徹先生「天然物化学への招待　～薬と毒は紙一重～」

ウコンや葛根湯など，根茎を利用した身近な生薬のお話からはじまり，薬用植物は，ヒトや動物にとって，毒にもなりうる場合があることを教えていただいた。講義の最後には，科学者倫理を持ち，社会貢献につなげることの大切さを教えていただいた。

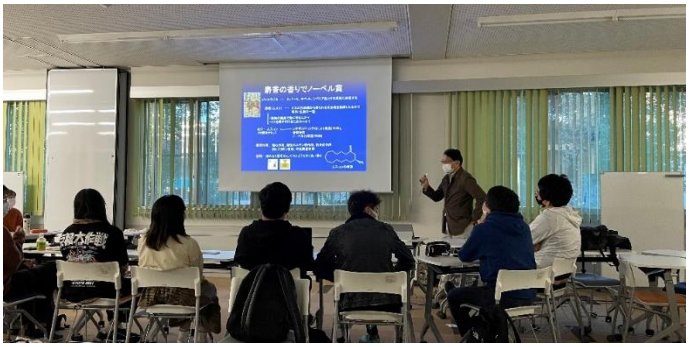

図８　第２回　光永先生の講義風景

③第３回（2021.12.17）大平幸子先生「社会問題から心の健康を考える」

2020 年１月からのコロナ禍で見えてきた日本人の病理（特に同調圧力）について，マスク警察などを事例にお話をしていただいた。日本人は他者への寛容さに乏しく，自分と合わない人は異分子として排除し，正義の押しつけをするところがあるということだった。

図９　第３回　大平先生の講義風景

④第４回（2022.01.21）高木朗義先生「協働と共創のまちづくり」

受講生の防災意識を高めたあと，自分の生活や地域における身近なことをソーシャル・ビジネスにして，「まちづくり」をおこなうお話をしていただいた。難しく考えず，人の役に立ちたい，日々の出来事の問題解決をしたいという気持ちがビジネスにつながるとのことであった。

図 10　第 4 回　高木先生の講義風景

⑤第 5 回（2022.02.04）内海志典先生「答えが 1 つでない問題にどのように答えをだすのか。」

人工肉に関する事前課題が出され，各自調べたことを持ち寄り，講義が始まった。「人工肉を食べることに賛成か，反対か」でグループが作られ，ワークシートを用いて，「個人，環境，コスト」の 3 つの視点で議論を深めていった。

図 11　第 5 回　内海先生の講義風景

４．まとめと今後の展望

本セミナーは，2021 年度に開講 4 年目を迎えることができた。ひとえに，本学の教養教育を盛り立てるために，様々な専門分野の多くの先生方が快く講義を引き受けてくださっている賜物である。

清島（2022a）でも述べたが，年 2 回のポスター掲示や Facebook に講義風景の写真をアップして広報活動をおこなっているものの，受講者数が伸び悩んでいる。2018 年度からの受講者数は，前学期と後学期それぞれ 2～4 名であったが，2021 年度は 10 名程度になり，ようやく講師を囲んで講義ができるようになった。まだまた受講者数は少ないが，講師とのディスカッションの様子や表情を見ている限り，専門分野以外の教養を身に付けることに興味がある比較的学習意欲の高い学生が多い。過去には，学部 3～4 年次に起業したり，eplus のメンバーとして教員とともに本学の教養教育を盛り立てたりなど，行動力や実行力

のある学生が受講している。数年前には，起業した学生が「企業の方々と事業を進めるうえで，社会人としての常識が必要であることはもちろん，教養を持ち合わせていると話題の引き出しが増えて会話が弾む」と話していたことがある。この学生のように，在学中に幅広く教養を身に付けることが自分自身の基盤となることに気づき，本セミナーを受講してほしいと考えている。毎年，本セミナーの講師の方々は，ご専門をかみ砕き，素人にも理解できるように分かりやすく講義をしてくださっている。前学期と後学期で 10 回，オムニバス形式で様々な教養を身に付けながら，講師と自由に議論が交わせる講義は，本セミナーのみである。

今後は，これまでおこなってきたポスター掲示や Facebook での発信だけではなく，本セミナーを受講していた卒業生を講師として招き，先輩として大学生の間に教養を身に付けて，人間としての幅を広げることの大切さを語ってもらう機会を設けるなど，学生の視点に合わせた広報活動にも力を入れていきたい。「総合大学だが，学生と教職員の距離が近い，自由に語り合う雰囲気がある」という特色を前面に掲げ，少しでも高年次教養教育を身近にとらえ，受講を促すとともに，専門以外の学問に興味を持つ学生を増やしていきたい。

【参考文献】

清島絵利子（2021）「Topic2 高年次教養セミナーを受講してみませんか」岐阜大学教育推進・学生支援機構 基盤教育センター ニュースレター「教養教育 NEWS」第 34 号 令和 3 年 12 月発行

清島絵利子（2022a）「学部を超えて集い，議論する高年次教養セミナー 2020 年度を振り返る」岐阜大学教育推進・学生支援機構年報第 7 号，pp.57-66 岐阜大学教育推進・学生支援機構

清島絵利子（2022b）「Topic1 高年次教養セミナーを受講してみませんか part2」岐阜大学教育推進・学生支援機構 基盤教育センター ニュースレター「教養教育 NEWS」第 35 号 令和 4 年 3 月発行